日本記号学会第 44 回大会個人研究発表・要旨

2024 年 6 月 22・23 日

鹿児島大学・郡元キャンパス

中国 SF 小説におけるディストピアと文化革命のメタファー

―劉慈欣の『三体』と王小波の幻想文学の事例から―

張 博（東京大学大学院）

発表要旨：

近年、劉慈欣の『三体』がヒューゴー賞を受賞し、彼の作品が次々とアニメや映画、ドラマにリメイクされることに伴い、中国 SF 文学は、国際的に急速に人気を博している。これを中国 SF の新浪潮（New Wave）と呼び、そのスタイルとテーマ性が、リアリズムを中心とした近代以来の中国文学の伝統を覆したと主張する研究者(Song 2023)もいる。この主張の妥当性はともかく、劉慈欣を代表とする近年の SF 文学の流行は、確かに現代中国の文学と社会の激しい変動を物語る。

中国 SF 文学の急激な隆盛は半ば予期せぬものとも言えるが、偶然の産物ではない。その芽生えは、1980 年代後半から 1990 年代初頭にかけての時期に遡ることができる。本発表は、中国 SF 文学がどこから生まれて来たのか、その起源を探そうとするものである。そこで、1990 年代の王小波の幻想文学（Speculative Fiction）に、その起源の 1 つが求められると提案する。

中国 SF 文学における最も重要なモチーフの 1 つは、文化革命（1966～1976）の経験と反省に基づくディストピアにある。例えば、『三体』では文化革命が 1 つの閉域として設定されている（楊 2019)。テーマとしての文化革命の体験と反省は、1970 年代から 1980 年代の「傷痕文学」と「反思文学」で確立されたものだが、そこでは SF 文学に必要なファンタジーの要素が欠如している。

ところが、1990 年代に入ると、王小波（1952～1997）が異色な作家として登場する。彼の幻想文学である『白銀時代』シリーズでは、かつて経験していた文化革命が、未来において再びやって来たと思われる世界が設定されている。そこでは、絶対的な権力と規律によって形成された不条理な状況に置かれた理性的個人が、性愛と狂乱を通じて抵抗を試みるが、いずれも失敗に終わる(戴 1998)。時代背景の設定や SM 的性愛関係の場面に文化革命のイメージとメタファーが多分に援用されることで、未来は歴史と重なるにつれ、1 つのディストピアとして現前化される。中国語圏で最も読まれている現代作家とされる王小波だが、彼についての議論は、いまだに文学史の主流から疎外されがちである。王小波の幻想文学において、ディストピアを最も重要なモチーフとする中国 SF 文学と、文化革命の体験と反省をテーマとする文学系譜との親縁関係が見られる。

参考文献

戴錦華. (1998).智者戯虐. *当代作家評論*, 86, 21-34.

楊駿驍. (2019). 連載・『三体』から見る現代中国の想像力　第一回/『三体』における閉域と文脈主義. *エクリヲ*, 11, 135-161.

Song Mingwei. (2023). *Fear of Seeing: A Poetics of Chinese Science Fiction*. Columbia University Press.